

「地域とつくろう 子どものあ・した」テーマに

川崎市立上丸子小学校(橋本晃一校長、児童564人)は1月20日、「コミュニティ・スクール報告会」を開催した。同校は文部科学省のコミュニティ・スクール推進事業委嘱校で「地域とつくろう 子どものあ・した」をキーワード

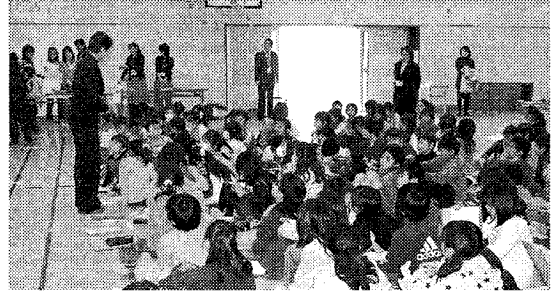
「コミュニティ・スクール報告会開催

同校は以前から地域と連携した教育活動に力を入れており、昨年度、文科省の指定を受けて学校運営協議会を立ち上げた。

学習支援、地域連携、学校評価…

6つのサポートチームが活躍

同校は、再開発が急速に進む地域にあり、高層マンションが次々と建てられ、児童数が増加している。地域も新しい住民との関係づくりを課題と受け止め、学校を核に新しいコミュニティづくりを進める重要性を認識していた。



6年生の「総合」では、学習支援ティーチャーが、詩の朗読などをした①。4年生の総合「多摩川学習」では、学習の成果を今後どう生かすか話していた②。保護者や地域住民が授業に入ることは「当たり前」になっている

報告会では、4、6年生が学習支援ティーチャーらが入った生活科と「総合的な学習」を、2、3、5年は算数の授業を公開した。

同校は以前から地域と連携した教育活動に力を入れており、昨年度、文科省の指定を受けて学校運営協議会を立ち上げた。

また、学習支援ティーチャーも、過去の授業参観では見えなかった授業の意図や展開、教員の指導上の工夫などが理解できるようになり、学校への信頼が増してきた。教員も学習支援ティーチャーを通して子どもの反応をきめ細かく把握でき、以前よりも発言を生かした授業づくりを心掛けている。

「ドに、地域住民の支援を受けながら教育活動を展開してきた。報告会では地域による学習支援活動や、新しいコミュニティづくりの取り組みなどを紹介した。

「今日は〇〇先生は来ないの?」「なんだ。相談に乗ってもらいたいことがあったのに」などの声が上がっている。

「子どもにとっても学校にとっても、保護者や地域住民が教室にいることが「当たり前」となり、「今日は〇〇先生は来ないの?」「なんだ。相談に乗ってもらいたいことがあったのに」などの声が上がっている。

保護者や住民が授業に入ることが「当たり前」

元名は「命のあゆみ」。これまで保健師や助産師の話の聞いたり、赤ちゃんや母親と触れ合ったりすることで命の尊さを学んでいた。

修学旅行では、夜の学年集会で、自分のこれまでの歩みを振り返り、家族について考える時間を設定。その後、学校が事前に預かっていた家族からの手紙を子どもたちに渡し、家族の思いを感じ取る。翌日は、群馬県の星野富弘美術館を訪れて作品に触れ、たくさんの人に支えられ今の自分があることを認識させるようにした。

公開授業は、修学旅行で選んだ星野さんの詩を大切な人に贈る内容。その詩を選んだ理由や、込められた思いなどを話し合い、気持ちを伝え合っただけでなく、外部講師が星野さんの生い立ちや生きざまなどを説明し、学習支援ティーチャーが詩を朗読していた。

4年生は多摩川学習で学んだことを今後どう生かすかを議論。

「3年生に伝えて来年の学習に役立ててほしい」と強調した。

上丸子小 411・2221